

差)であり、各群間に有意差を認めた ($p < 0.01$)。健常者では $71.2 \pm 5.18 \text{ ml/min}$ であった。

2. 距離当り酸素摂取量は、屋外自立、屋内自立および屋内半自立群それぞれ、 $0.31 \pm 0.055 \text{ ml/kg/m}$, 0.32 ± 0.091 , 0.71 ± 0.157 (平均±標準偏差)であり、各群間に有意差を認めた ($p < 0.01$)。健常者では $0.18 \pm 0.014 \text{ ml/kg/m}$ であった。

3. 分時酸素摂取量は、屋外自立、屋内自立および屋内半自立群それぞれ、 $14.2 \pm 3.39 \text{ ml/kg/min}$, 11.2 ± 2.95 , 13.4 ± 5.16 (平均±標準偏差)であり、各群間に有意差を認めなかった。健常者では $12.2 \pm 1.56 \text{ ml/kg/min}$ であり、患者群とはほぼ同じ値を示した。

4. 心拍数は、屋外自立、屋内自立および屋内半自立群それぞれ、 $90 \pm 17.8 \text{ beats/min}$, 104 ± 16.8 , 112 ± 20.6 (平均±標準偏差)であり、各群間に有意差を認めなかった。健常者では $85 \pm 11.1 \text{ beats/min}$ であった。

〔結論〕 以上より、脳卒中患者の歩行能力評価の指標として、歩行速度および距離当り酸素摂取量の測定が有用であることが判明した。

3. ATL 細胞株による OAF 産生

笠原勝幸¹、山本逸雄²、山室隆夫²、
多賀谷温²、淀井淳司²

(京都大学医療技術短期大学部¹、京都大学医学部²)

ATL は T 細胞起源の慢性リンパ球性白血病であり、西日本に多くみられ、HTLV-1 型ウイルスにより活性化されたヘルパー T 細胞に由来すると考えられる。CSF, DIF, IL-2, γ -インターフェロン, ADF などのリンフォカインを産生すると報告されている。又、ATL の患者にコントロールし難い著明な高カルシウム血症を合併することが多く、腎不全や肺石灰沈着を生じて、ATL における死亡原因の最大の一つとなっている。高カルシウム血症が悪性腫瘍に伴うのは希ではなく、次のようなメカニズムにより生じると考えられている。①腫瘍細胞によ

る骨組織の破壊(乳癌など)。②PTH 類似物質の産生分泌。③Vit D₃, プロスタグランジン等の産生分泌。ATL に伴う高カルシウム血症に際して、腫瘍細胞による直接的な骨破壊は組織検査において認めず、破骨巨細胞の増生が認められることより、OAF タイプの骨融解促進物質を分泌している可能性が予測される為、次のような検索を行った。ヒト成人型 T 細胞白血病の樹立株である ATL-2 の培養上清を材料として用いた。骨吸収活性(OAF 活性)は 2 日令マウスに ⁴⁵Ca を注射し、2 日後に頭蓋骨を切り出し、組織培養を行い、培養液中への ⁴⁵Ca の放出能を指標として測定した。精製前の ATL-2 細胞培養上清は著明な骨吸収活性を示し、IL-1 のも同様に強い骨吸収活性を示した。セファクリル-200ゲルクロマトグラフィーにより分画すると、蛋白濃度に 2 つのピークが抽出された。このうち骨吸収活性を強く示すのは 20 KD の ADF 活性のピークよりやや早い溶出部位を示した。この骨吸収活性陽性分画は MC3 T3-E1 の DNA 合成能を抑制したが、IL-1 の、ADF にも同様の作用を認めた。以上のことより ATL 細胞が強い骨吸収因子を産生分泌し、IL-1 α , ADF に近いが少し異なる分子量の物質であろうと考えられた。

4. 母乳栄養確立に影響する要因—保健行動学の視点から—

長谷川まなみ(専攻科助産学特別専攻)

乳児の健全な発育のために、母児のスキンシップや栄養、免疫等の面から母乳哺育の重要性が指摘されている。母乳栄養確立に関しては様々な影響要因の検討がなされているが、母乳哺育を行う産婦自身の行動に注目した研究はない。

本研究では産婦の授乳行動を保健行動学の視点からとらえ、母乳栄養確立に強く関連している背景的特徴を明らかにするために下記の調査を行った。

理論的枠組には Cheryl L. Cox の Interaction Model of Client Health Behavior (保健行動相